

2001年度実施研究会報告

2001年度に実施された研究会の報告です。それぞれ2002年3月に中間報告をまとめ、最終報告をめざして次年度に引き継がれます。中間報告はアジア研ホームページで公開する予定です。

(<http://www.ide.go.jp>)

■「アフリカ経済論の再構築」研究会

主査：平野克己 幹事：福西隆弘 委員：峯陽一
高橋基樹 赤林英夫 西浦昭雄 須藤裕之 山形
辰史

日本の開発経済学テキストと欧米のそれが近年かなり異なってきたことを、皆さんは御存知だろうか。その違いを思い切って要約すると、日本のものはマクロ経済的であり他方はミクロ経済的である。前者は発展のメカニズムに焦点があり、後者はなぜ発展しないかに焦点がおかれている。

昨年バーダン&ウドリー『開発のミクロ経済学』の翻訳本が出たが、バーダンは南アジア研究者であり、ウドリーはアフリカ研究者である。そう、日本と欧米における開発経済学の違いは、日本の開発経済学者が主にアジアを見ており、彼国はアフリカを見ているという違いなのである。

本研究会は、アフリカ研究が生み出した最先端の開発経済学を強く意識している。その成果を取り入れて、日本におけるアフリカ経済論を作り直したいのである。幸いアジア研には開発研究部があって、最先端研究に詳しい同僚達がいる。彼らの話を聞き、外部からも講師をお呼びして、この一年はひたすら勉強を重ねてきた。ペースキャンプ作りをしてきたと言ってもよい。

1月の研究会は豪華絢爛で、かつ長駆流浪であった。午前中には赤林委員に確保して貰った慶応三田キャンパスの部屋で速水佑次郎先生に講義頂き、午後は高尾山中の拓殖大学国際開発学部にて渡辺利夫先生の講義を伺った。日本の開発経済学を担う両氏と親しく接し、アフリカ経済研究のあるべき姿について、皆で考えたかったのである。拓殖大学を出たときには雪が降っていた。帰り道を辿るわれわれの熱気を、優しく癒してくれるようであった。

2年目の研究会は、「新アフリカ経済論」研究会と名を変え、いよいよ登頂を始める。新たに野上裕一（ア

ジ研）、中村亨（神戸学院大学）両氏を加えて頂きを目指す。1年目に作った報告書は、近々当所のホームページ上で公開する予定だ。そこに、われわれが行こうとする数本の登頂ルートが書かれてある。是非御覧頂きたい。

本研究会には大勢のオブザーバーが参加している。主査の性向から、熱した議論の後は皆でわいわいとビールを啣る。志は高いが楽しいチームである。

(平野克己)

■「第三世界の紛争と国家」研究会

主査：武内進一 幹事：山田紀彦 委員：川島緑
遠藤貢 落合雄彦 井上あえか 西芳実 井上恭
子 酒井啓子 津田みわ 天川直子 荒井悦代

この大仰なタイトルの研究会を一介のアフリカ屋である私が組織することになったのは、アジア研のカンボジア研究者である天川直子さんに焚き付けられたからだ。彼女は、私が編者となった『現代アフリカの紛争——歴史と主体——』（アジア経済研究所、2000年）を読んで、アジアとアフリカで紛争の比較研究をやらないかと誘ってくれたのである。話を聞いたとき、何と酔狂な、と一瞬思ったが、すぐにこれは千載一遇のチャンスだと考え直した。

『現代アフリカの紛争』で私が考えたかった問題の一つは、アフリカの紛争が持つ今日的な意味は何かということだった。この論点を深めるためには、どうしても他地域の紛争との比較が不可欠になってくる。ルワンダもカンボジアも、不幸にしてジェノサイドを経験したが、両国で起こった事態には共通点も相違点もあるはずだ。地域専門家の間でそこを議論すれば、お互いにとって得るところが非常に大きい。紛争の発現には、国内要因のみならず、周辺国や国際政治の力学が作用するから、自分の専門地域を相対化することの必要性和意義は大きいはずである。

また、他地域の専門家と共同研究を実施することで、第三世界の紛争全般をどのように理解すべきかという重要な問題にアプローチすることができる。現代世界においては、武力紛争が第三世界に集中し、しかも国家間戦争ではなく内戦型の紛争が中心になっている。この点は、例えば国際政治学では国家の脆弱性に焦点を当てた説明がなされているが、「国家の脆弱性」といってもその内実は地域によってさまざまであろう。各地域の具体的事例に立脚した議論を戦わせるなかから、国家と紛争の関わりについて新たな問題提起ができる

のではない。

こうした私の考えに幸い賛同が得られ、昨年 4 月から 2 年間の研究プロジェクトが始まった。扱う国や地域は次のとおりである。シエラレオネ、ケニア、南アフリカ、中部アフリカ（ルワンダ、コンゴ）、イラク、カザフスタン、カシミール、スリランカ、北東インド、カンボジア、ラオス、インドネシア、フィリピン。研究会で扱いたかった国はもっとあるし、ラテンアメリカや東南欧も入れたかったが、諸般の制約からこれで精一杯だった。それでも、これだけの数の「地域のプロ」が一堂に会すると、議論に厚みは相当なものである。平成13年度は都合 5 回研究会を開いたが、ほとんど毎回まる 1 日の議論となった。研究会の後、私はいつも頭の芯が疲労困憊、酒を飲まずにいられなくなる。（武内進一）

■「開発途上国の農産物流通：アフリカとアジアの経験」研究会

主査：高根務 幹事：児玉由佳 委員：児玉谷史朗
米倉等 上田元 黒崎卓 岡本郁子 坂田正三
寶劔久俊

1980年代以降にアフリカ諸国を覆った構造調整・経済自由化の波は、それまでの国家管理型の経済運営を大きく変革させました。農業部門でも、マーケティングボードを中心とした国家管理型の農産物流通制度は次第に姿を消し、自由主義的な流通制度が主流となりつつあります。

同じような流れは、いくつかのアジア諸国にも見られます。「ドイモイ」下で急速に自由化が進んだベトナム、「ビルマ型社会主義」から転換したミャンマー（旧ビルマ）、近年 WTO 加盟を果たした中国などは、その典型といえるでしょう。

研究会では、これらアフリカとアジアの国々の農産物流通の実態を明らかにしながら、各国の経験を比較検討しようと試みています。自分が研究対象としている国の経験を他のアフリカ諸国との比較で検討してみるだけでなく、視点をアフリカの外にも向けて見ること新たな発見が生まれるかもしれない、という期待が研究会運営の背景にはあります。このような期待を胸に、2001年度は下記のような報告内容で研究会を開催しました。2002年度は研究内容をさらに掘り下げ、最終報告書を刊行する予定です。（高根 務）
<研究会報告内容および報告者>

- 「カザフスタン小麦市場の移行過程」（錦見浩司）
- 「ガーナのココア流通制度、1885 - 2001」（高根 務）
- 「エチオピアの経済自由化と社会変容」（児玉由佳）
- 「中国における食料流通政策の変遷と農家行動分析」（寶劔久俊）
- 「ベトナム市場経済化の中の米流通」（坂田正三）
- 「ザンビアにおける農産物流通政策と制度の変化」（児玉谷史朗）
- 「インドネシアにおける農産物流通：東ジャワのトウモロコシおよび南スラウェシのカカオ」（米倉 等）
- 「タンザニアの他民族入植社会における農耕と流通のモラル・エコノミー：水利組織と作物処分の実態と言説」（上田 元）
- 「ミャンマーにおける流通自由化政策と農家の反応：リョクトウ産地の事例」（岡本郁子）
- 「インドにおける青果物流通：デリー・アーザードプル市場データの解題」（黒崎 卓）

海外通信

■望月克哉（在ラゴス海外調査員）：昨年末、ナイジェリア南西部に位置するイバダンから悲報が届いた。同地に本部を置く国際熱帯農業研究所（IITA）の研究員である石田英子さんが急逝されたという。石田さんは、1994年にナイジェリア中部に居住するヌベ人農民を対象にした「民族土壌学」そして伝統的な低地農業の調査を開始。その後、IITA に赴任して、マメ科の被覆植物を用いた短期休閑作付システム、さらにカシューなど果樹種を利用した改良休閑システム等を研究テーマにしていた。ヌペランドでの研究は、農民参加型の実践的なもので、それはアフリカの農業部門が孕むジレンマに挑み、かつ調査の結果を現地に還元する試みでもあった。門外漢の当方の頼みにも気軽に応じて、ご自宅からサンダル履きのまま試験圃場に案内していただいたのは、つい数カ月前のことなのである。自然科学と社会科学の連携の必要性を真剣に語るその口調が、いまでも耳に残っている。共同研究の機会は失われてしまったけれども、その遺志を忘れてはなるまい。ここにご冥福を祈りつつ。

■吉田栄一（在カンパラ海外派遣員）：ムセベニ・ウガンダ大統領の「ムガベ化」を報じる気になる記事がありました。コンゴ派兵にともなう軍事予算の増

案を援助国に却下されていらい、ムセベニの対援助国外交が僻みじみてきた由。ウガンダとムセベニに対する海外での優等生イメージはコンゴ派兵とその資源略奪疑惑で過去のものとなったようですが、国内でも世界第2の腐敗国のレッテルや予算の52%を支えるODA、納税ランキングトップ100社が全て非ウガンダ人企業という現実、過去10年間の経済成長の真価が問われ始めているようです。おりしも2月14日はカンパラ市長選。反ムセベニ派候補セバナ氏の圧勝に将来を感じはじめているのはムセベニ大統領自身でしょう。

話は転じてフィールドワーク。零細企業にとってのリスクを計測しよう暗中模索中。ある日、「停電か？」と確認に行けば、ほとんどの作業場ではまだ手動の工具が主流。日常的な「窃盗か！」と、夜戻ると、家具は屋外に放ったまま。マホガニー、糸杉の家具は重くて簡単に運べないそうです。屋外作業だから「スコールか！」と大雨に駆けつけても何処吹く風。「じきに乾く」の一言。若干の危惧を自分の研究仮説に感じながらも、ここは焦らずに他の業種の産地や、農村部の産地とも比較してみたいと思います。(eyoshida@afsat.com)

■佐藤章（在アビジャン海外派遣員）：日本での束の間の休暇から戻ったのが1月4日。それ以来、原稿書きに没頭する生活を送っています。もやもやした目の曇りがいくぶん晴れてきたようで、気がつくとな身の周りには書くべきテーマも資料もわんさと転がっておりました。予想を上回る情報量が、ひたすらアウトプットせよというシグナルを送ってきます。「書きながら考える」という仕事のリズムが出来てきたようです。2001年度に当地でイヴォワリアンの若者2名と実施した研究アトリエの成果として、新年度早々に報告書「コートディヴォワールの高等教育便覧：歴史と現状」をアビジャンで刊行します。私は植民地期の高等教育について一章を書きます。自分にとって初めての仏語原稿になります。同じ頃には「国民和解フォーラム」の速報分析を『アジア経済』に発表する予定です。資料を集めてはひたすら仕事机に向かうという今の生活は、盛暑のアビジャンには似つかわしくなく、自分でも苦笑してしまうのですが、この山のような資料と格闘しているかぎり、ここが、そして、これが自分のフィールドな

のにちがいません。今年度は、独立以来の公式統計の総目録をまとめるアトリエを立ち上げ、それからいよいよ公文書館での調査を開始する計画です。(akiras@globeaccess.net)

■牧野久美子（在ケープタウン海外派遣員）：ケープタウンに来て約半年になります。私が所属するケープタウン大学では、日本より一足早くこの2月には2002年度の授業が始まり、任期はあと1年半あるものの、気分はもう「2年目」です。「南アフリカに来てどれくらい？」という、大学の中でも出張先でも、初対面の人が二言目には発するお決まりの質問に対して、「まだ来たばかり」というニュアンスの初々しい(?)受け答えもできなくなってきました。赴任前に慌ててオートマ限定免許を取得した「超」のつく初心者ドライバーであった私が、今では毎日クルマを乗り回しているのだから、やはりそれなりに時間が経ったということなのでしょう(とはいえ縦列駐車は今でも大の苦手……)。

本当は、研究の進捗状況によって半年という期間の長さを実感したいものですが、現在進行形の動きを追うのに精一杯で、なかなか歴史的な背景にまで踏み込めずにいます。本号では最近の社会保障制度改革に関する議論を取り上げましたが、今後はそのような議論が出てくるコンテキストについて、もっと掘り下げて考えていきたいと思っています。

アフリカレポート 第34号

2002年3月29日発行

編集・発行 日本貿易振興会 アジア経済研究所

編集 地域研究第2部

発行 研究支援部

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

TEL 043-299-9735 FAX 043-299-9736